

新刊紹介

ガイ・スタンディング著 池村千秋訳

『ベーシックインカムへの道—正義・自由・安全の
社会インフラを実現させるには』

B6版 / 388頁 / 定価 2,000円+税 / プレジデント社, 2018年

小嶋 新

関西学院大学人間福祉学部非常勤講師

1. はじめに

2016年6月のスイスにおける国民投票、フィンランドにおける給付実験の中止、カナダのオンタリオ州における導入実験の打ち切り。これらは、ベーシックインカム（以下、BI）についてである。BIについてはとにかく誤解や印象論が多い。そのような誤りを正した上で、BIについて議論する土台作りをするために、本書は格好の材料になる。本書は、BIEN(Basic Income Earth Network)の共同創設者であり、共同名誉理事長でもあるガイ・スタンディング氏によるBIの体系的な入門書である。著者が、「ベーシックインカムへの賛成論と反対論を一とおりに読者に紹介することを目的としている」と言うように一種の啓蒙書だと言ってもよいだろう。「これまでのBIENの活動、2016年7月のソウル大会にいたるまで16回の世界会議と、そこで発表された何百本の論文を土台にしている」ため、入門書といっても、本書のそれぞれの主張には十分な重みを感じられるはずである。

2. 本書の内容

本書は、第1章から第12章、付録で構成されている。第1章は、BIの基本的な定義や歴史的

な経緯を紹介している。BIとは、「個人に対して、無条件に、定期的に（たとえば毎月など）、少額の現金を配る制度」であり、その「根本的な目的は、経済面での基礎的な保障を提供すること」である。

第2章から第5章では、社会正義、自由の確保、経済的な安全の提供という3つの観点から、BIの必要性について、政策的な観点ではなく、理念的な観点から紹介する。第1に、社会正義という観点である。BIは「社会の富を共有財産と位置づける発想と結びついて」おり、「社会共通の遺産の一部を、恵まれない地域の人々に移転させる仕組み」だと位置づける。これは、社会配当という考え方である。社会の共有財産とは、土地やその他の有形資産、金融資産や知的財産など幅広い。第2に、自由の確保という観点である。BIは「自由主義の理念に基づいて自由を確保する上で欠かせない基礎的経済権と位置づけることができる」。これは、「共和主義的自由を実現するためには、すべての人が十分なお金を持たなくてはならない」という考えが背景にある。つまり、「自由主義の考え方に立つなら、人々の基礎的ニーズを満たせる水準のベーシックインカムを導入すれば、それだけで必要にして十分ということになる。それに対し、共和主義の考え方に立つなら、ベーシックインカムは必要だが、それだけで

は十分ではない」ということである。第3に、経済的な安全の提供という観点である。BIを「導入すべき根拠として最もよく言われるのは、貧困を削減するための最も有効な方法だから」である。それは、BIがほかの社会政策と異なり、「受給者の尊厳を損なうことなく貧困を緩和できる」からだ。しかし、著者は「貧困の根絶より、経済的な安全の保障のほうが重要だろう」と考える。二十世紀型の福祉国家において特徴的な社会保険制度が、産業構造の変化により機能しなくなっている。著者は「人々の経済的な安全を脅かす要因が二十世紀半ばと根本から変わった」という認識を基に、BIは「すべての人に安全を保障する手段として考えた場合、ウィリアム・ベヴァリッジやオットー・ファン・ビスマルクの系譜に連なる社会保険型の制度より優れている」と述べる。

第6章以降はBIを政策的な観点から論じていく。第6章は、BIに対して頻繁になされる批判を列挙し、反論している。これらをすべて紹介することはできないが、いくつかの批判を取り上げておきたい。「お金を配れば問題が解決するという発想は単純すぎる」、「金持ちにも金を配るのは馬鹿げている」、「浪費を助長する」、「移民の流入が加速する」などである。第7章と第8章は、BIの批判の中でも最も多く取り上げられるもの、つまり財源と、仕事と労働への影響の問題である。財源の問題では、BIには「さまざまな給付水準があってもいいという点、段階的に導入してもいいという点、そして、財源確保の方法はいろいろあるという点」を前提にするべきだと著者は主張する。特に、財源についての批判者は著者が言う「大ざっぱな計算」を基に批判する。その計算に対して、財源確保を見据えた上で、著者は4つの視点から批判する。「第一に、高所得者層からベーシックインカム相当分を税で取り戻す可能性を考慮していない」、「第二に、資力や行動の調査が不要になることで行政コストが軽減される点も無視」、「第三に、社会保障以外の政府支出を減

らさないものと決めつけている」、「第四に、近代国家の財政システムの特徴である数々の減免措置や控除制度を無視している」。それ以外にも、BIが「経済に動的な影響を及ぼす可能性を無視していること」も指摘する。そして、仕事への影響の代表的な批判は、「すべての人にベーシックインカムが給付されれば、『怠け者』が増え、労働力の供給が減るということだ」。しかし、著者は、「人々がおこなう『仕事』の量を増やし、生産性を高め、さらには『余暇』の質も高める」と考えている。「それらの統計では、有給の労働と求職活動しか『仕事』として数えていない」のであり、そもそも家事などの「金銭報酬をとまわらない仕事のほとんどが『仕事』とみなされなくなったのは、二十世紀に入ってから」である。BIは「人々が何もせずに怠惰に過ごすためのお金を配る制度ではなく、『やりたいこと』と『できること』をやる自由を与えるための制度」と述べている。

第9章では、BI以外の選択肢を検討している。例えば、最低賃金、社会保険、資力調査に基づく社会的扶助、ワークフェア、給付型税額控除などである。第10章から第12章では、これまで実施されてきたBIの試験プロジェクトについて紹介されている。付録には、試験プロジェクトの進め方が簡潔にまとめられている。BIはすでに夢物語ではなく、政策オプションのひとつであるという著者の考えが感じ取れる。

3. 結び

本書はBIのこれまでの議論をコンパクトに、且つ網羅的にまとめている。BIに関心がある実務家、研究者、学生はもとより、広く社会福祉や社会政策に関心があるひとたちにとっての入門書としても最適だろう。これからBIが議論されるにあたり、本書で提示された論点を踏まえた上で議論がなされることが望ましいと考える。